

# 丸山遺跡

— 経営体育成基盤整備事業隅地区に伴う —  
発掘調査報告書



2010年3月  
益田市教育委員会

## 序

本書は、益田市教育委員会が平成 20 年 5 月から 7 月にかけて行った益田市隅村町に所在する丸山遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書となります。

隅村町は高津川と匹見川とが相会する地点の東側に位置して、蛇行する匹見川の堆積作用により形成された肥沃な農業地帯といえます。昨年度の調査からは、中世期に係る多くの遺構や遺物の検出などにより近世期まで続く小集落の営みが推察されたことに加え、さらにその周辺からは原始・古代にまで遡る多くの遺物が確認されたことで、このたびの調査成果も含めると、長い期間に亘る人間活動の営みが明らかとなっていました。

本書は、本地區では2回目となる発掘調査の概要をまとめたものですが、こうして古文書等にも遺されていない歴史の一端が押明した成果を、地域の歴史や文化財保護に対する理解と関心を深めるうえで広くご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたって全面的にご協力をいたたきました隅地区農業生産基盤生活環境整備事業推進議会をはじめ、土地所有者、地元自治会、事業主体者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月

益田市教育委員会

教育長 三浦正樹

## 例 言

本書は 2008(平成 20) 年度に、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所の委託を受け実施した経営体育城墓盤整備事業隣地区に伴う丸山遺跡の発掘調査報告書である。

1. 発掘調査は平成 20 年 5 月 27 日から同年 7 月 17 日まで行っている。また同年 6 月 18 日には市内 中西中学校の生徒を対象とした発掘体験を、同年 7 月 19 日には地元住民への調査成果の報告を目的とした現地説明会をそれぞれ行った。
2. 調査に要する経費は 92.5% を島根県益田県土整備事務所が負担し、農家負担分である 7.5% については国庫補助事業市内遺跡発掘調査等で負担した。
3. 発掘調査を行った地番は島根県益田市隅村町 148 番地 1 丁外である。
4. 調査は下記の体制で行った。

調査主体 益田市教育委員会

事務局 益田市教育委員会文化財課

調査員 同 主任 山本浩之

調査補助員 同 嘴託職員 寺戸淳二

調査指導 島根県教育府文化財課 是田 敦

調査助言 元島根大学教授 田中義昭

5. 調査に従事していただいた方々は次のとおりである(敬称略)。

○発掘調査作業

石川信義、糸賀義人、桐木達也(中西中学校ー発掘体験)、掠 梢、棕 務、村上博一、柳山泰廣

○室内整理作業 青木仁美

○遺物実測・トレース化作業 田中義昭氏主導「いなか倅」会員 井上喜代女、福原恭子、鶴原 靖

6. 掘図中の方位は磁北を示す。また遺構略号の P は柱穴状遺構を示し、現位置法により採り上げた遺物については No(Po) と同義)を付記して表示している。

7. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は益田市教育委員会で保管している。

8. 本書の挿図は青木及びいなか倅が担当し、撮影及び執筆は山本が行った。

## 本文目次

1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と歴史的な環境	2
3. 調査の概要	5
(1) 調査区の設定	5
(2) D-a調査区の調査状況	9
(3) D-b調査区の調査状況	10
(4) D-c調査区の調査状況	12
4. 出土遺物と周囲の採取遺物	14
(1) はじめに	14
(2) 実測遺物	16
(3) 周域からの採取遺物	22
5. 小結	25

## 挿図目次

写真1 空中から俯瞰した隅村町	1
第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	3
第3図 調査区配置図	5
第4図 地図名図	5
第5図 上層断面図(1)	6
第6図 土層断面図(2)	7
第7図 上層断面図(3)	8
第8図 土層断面図(4)	9
第9図 土層断面図(5)	10
第10図 調査区平面図	11
第11図 出土遺物実測図(1)	15
第12図 山上遺物実測図(2)	17
第13図 出土遺物実測図(3)	19
第14図 山上遺物実測図(4)	21
第15図 出土遺物実測図(5)	22
第16図 採取遺物実測図	23
第17図 俯瞰した事業範囲地形図	25

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	3
第2表 遺物集計表	14
第3表 実測遺物観察表	18

## 写真図版目次

図版1-1 西側からみた調査地点(遠景)	26
—2 西側からみた調査地点(近景)	26
—3 D-b調査区5層の表出状況	26
図版2-1 D-c調査区4-B層の表出状況	27
—2 D-a調査区6層の表出状況	27
—3 D-b調査区7-B層の表出状況	27
図版3-1 D-c調査区5・6層の表出状況	28
—2 D-a調査区の土層堆積状況(北壁)	28
—3 D-b調査区の土層堆積状況(西壁)	28
図版4-1 D-c調査区の土層堆積状況(北壁)	29
—2 Po06(須恵器・横瓶)の検出状況	29
—3 Po12(土師器・壺)の検出状況	29
図版5-1 Po13(古磁・碗)の検出状況	30
—2 発掘体験風景	30
—3 発掘作業風景	30
図版6-1 Po1の検出状況(D-c調査区)	31
—2 下位層の確認状況(試掘坑4)	31
—3 流木の検出状況(試掘坑2)	31
図版7-1 D-a調査区の完掘状況(西から)	32
—2 D-b調査区の完掘状況(東から)	32
—3 D-c調査区の完掘状況(南から)	32
図版8-1 遺跡の完掘状況(東から)	33
—2 遺物採集地点を望む	33
—3 施工後の調査地点(西側から)	33
図版9-1 実測遺物1	34
—2 実測遺物2	34
—3 実測遺物3	34
図版10-1 実測遺物4	35
—2 実測遺物5	35
—3 実測遺物6(採取遺物)	35

## 1. 調査に至る経緯

平成 19 年度には隅地区経営体育成基盤整備事業に伴い、隅村町で初めてとなる本調査を実施して、おもに中世期に係る遺構や遺物の検出状況から、主に中世期から近世期に至る集落の営みを確認されていたところである。

一方、その調査と同時に周域の遺物表面採取調査を行った結果、北側直下の耕作地を中心として弥生土器や土師器、須恵器、貿易陶磁器などの原始から中世に至る遺物が多く散見されたため、文化財保護の観点から事業者である島根県益田県土整備事務所あてに平成 20 年 4 月 8 日付け益教文第 13 号をもって発掘調査の必要性を協議している。

これを受けた事業者は、同地が開発予定地内であり事前に発掘調査が必要との承諾をふまえ、平成 20 年 4 月 18 日付け益整第 1244 号の埋蔵文化財の通知を、益田市教育委員会経由で島根県教育委員会教育長あてに送付し、同様に同教育長からの勧告（平成 20 年 5 月 1 日付け島教文財第 2 号の 7）を事業者所長あてに通知している。

こうして益田市教育委員会は、島根県教育委員会教育長あてに平成 20 年 5 月 16 日付け益教文第 54 号をもって埋蔵文化財発掘調査の着手を通知し、事業者とは平成 20 年 5 月 19 日付けで委託契約書の締結のうえ、平成 20 年度農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う本発掘調査を平成 20 年 5 月 27 日から着手し、工事着手予定の同年 8 月初旬を 10 日間以上残して、同年 7 月 17 日には調査を終了している。

なお同年 6 月 18 日には、職場体験として益田市立中西中学校 3 年生（当時）の桐木達也氏に発掘を体験して頂いた（図版 5-2）とともに、同年 7 月 3 日には島根県教育庁文化財課 是田氏に調査指導を受けている。また地元の方々を中心に調査成果を識って頂くために同年 7 月 19 日には現地説明会を開催して、猛暑日に拘わらず多くのご来場を頂いたのであった。



写真1 空中から俯瞰した隅村町(国土地理院所管)

## 2. 遺跡の位置と歴史的な環境

### (1) 遺跡の位置

益田市は島根県の西端に位置しており、益田川、高津川両河川によって形成された平野上に広がる市街地を中心として、平成 16 年 11 月 1 日の旧美都町・旧匹見町との合併によりその市域は拡大して、現在（平成 21 年 12 月末）面積約 733 km<sup>2</sup>、人口約 51,000 人を有する都市となっている。東は浜田市、南は津和野町と吉賀町及び広島県安芸太田町と北広島町、西は山口県萩市田万川町に接し、北は日本海に面して島根県西部では中核都市の 1 つとして機能している。



第 1 図 遺跡位置図

### (2) 歴史的な環境

本遺跡の所在する『高城地区』には原始～古代に係る顕著な遺跡は見受けにくいようであるが、むしろ隅村町から北西域にあたる『西益田(行政)区』のうちの『豊田地区』(横田町、安富町、梅月町、本俣賀町、左ヶ山町)に今のところ多くが散見できるようである。

市内の縄文遺跡は縄文銀座といわれる匹見町の他には、周辺では安富町の安富王子台遺跡から縄文後期後半～晩期に至る土器が発見されている。また弥生時代には同遺跡から弥生前期土器や、その至近の羽場遺跡では弥生中期土器の多数出土した環濠や土坑墓、中小路遺跡では弥生中期～後期に係る遺物に伴う堅穴住居跡や土器棺墓など、そして横田町の家下遺跡からは弥生終末期土器などが多くみられて、高津川中流域平野には水統した大集落の営みを窺うことができる。

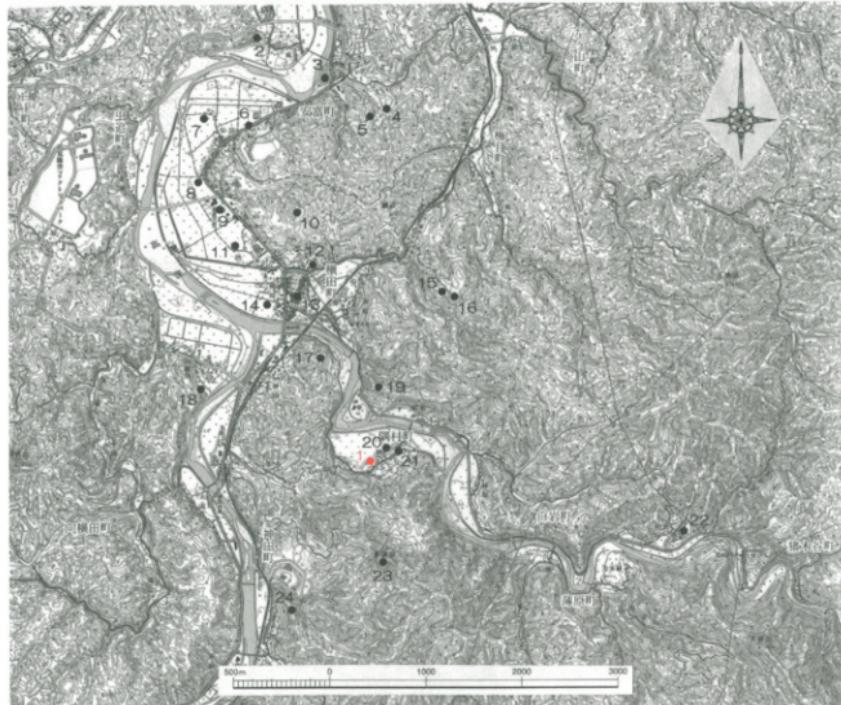
古墳時代に入ると、『豊田地区』では奥田古墳群(円墳)や上野横穴などがみられ、また律令制下では市域に『美濃郡』の誕生を見るが、八郷に分割されるうちの『大農(おおの)郷』に現在の『西益田(行政)区』の大部分が相当すると考えられる。そして平安末期以降は『長野庄』などの莊園へと推移していく過程の中で、前述の中小路遺跡からは官衙的要素の強い遺構群も検出されるなど地域拠点的な集落様相を窺わせるとともに、家下遺跡でも奈良～平安期に係る遺物などが多くみられている。

鎌倉以降の中世期には、益田氏や吉見氏及び諸氏の入部に従って同地にも彼らの所領支配が及ぶよう

丸山遺跡の所在する隅村町は市内中央西寄りの津和野町側に位置し、高津川と合流する匹見川の下流域に広がる平野部で穀倉地帯となっている。

現在は隅村町、神田町、向横田町、白岩町、薄原町、猪木谷町で構成される『西益田(行政)区』のうちの『高城地区』に組み込まれ、隅村町は人口 329 人、世帯数 115 戸(平成 20 年 2 月時点)を数えて、匹見川を境に隅、赤松の 2 自治会区に分かれている。本遺跡は前者に属して、また本域は往古より匹見川の洪水禍に多くさらされてきたと云われている。

になる。詳細は不詳だが、中世期を通じて二氏を中心とした所領争奪が繰り広げられた地であったと伝



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

番号	名 称	種別	概 要	番号	名 称	種別	概 要
1	丸山遺跡	集落跡	弥生、古代～中世、近世	13	中世横田市遺跡	その他	
2	大嶽城跡	城跡	山城、郭、堅掘、横掘	14	中原遺跡	散布地	陶磁器
3	安富城跡	城跡	山城、郭、堅切	15	石塔寺極現経塚	神社跡	
4	長原里敷跡	館跡		16	石塔寺極現境内跡	神社跡	
5	美田古墳群	古墳	積石塚円墳	17	本郷寺城跡	城跡	山城、郭、掘切、堅掘
6	羽場遺跡	集落跡	弥生前～中期、中世	18	向横田城跡(市指定)	城跡	山城、郭、土塁、空堀、掘切
7	中小路遺跡	集落跡	弥生中～後期、奈良～平安 中世前半期	19	井出カケの城跡	城跡	山城、郭、土塁、掘切
8	安富王子台遺跡	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	20	丸山の裡(市指定)	天記	丸山八幡宮境内
9	大畠遺跡	集落跡	陶磁器	21	鴻村窓跡	窓跡	近代以降
10	豊田城跡	城跡	山城、郭	22	久木遺跡	散布地	朱雀、宝珠
11	家下遺跡	集落跡	弥生終末期、奈良～平安	23	高浪山城跡	城跡	山城、郭、堅切
12	上野横穴	横穴	須恵器、刀劍	24	三星城跡	城跡	山城、郭、掘切

第1表 周辺の遺跡一覧

えられ、最終的には益田氏に帰したという。同周城には安富城跡、豊田城跡、本郷寺城跡、向横田城跡、三星城跡、また遺跡の南側には斎藤隱岐守が築城したと伝える高浪（こうなみ）山城跡などの山城がみられ、彼らの残跡を偲ばせている。

なお、中小路遺跡や羽場遺跡などから出土した多くの貿易陶器類や石塔寺権現経塚出土の鎌倉初期頃と推定される中國製陶製経筒（豊田神社蔵、県指定文化財）などからは、当該期における土豪（地侍）級勢力の存在や流通・交易の様相、そして仏教文化の浸透状況などを窺える好資料といえよう。一方、遺跡の北東約200m地点の小高い丘に所在する隅丸山八幡宮は、正治年間（1199～1200）に勅進後、天正13年（1585）に再度造営を行ったとされるが、その際記念に境内に植樹されたといわれるイチイガシは市指定天然記念物となっている。

藩制期に入ると、他所へ転封となった益田氏や吉見氏の旧領地はそれぞれ浜田藩領・津和野藩領に再編されることになり、本遺跡の所在する『高城地区』は江戸期を通じて後者に属することになった。また洪水禍については既述のとおりで、宝曆3年（1753）の大洪水による被害の甚大さや、翌年度の水除の完工、そして明和3年（1766）の新田床の開発などが記録に遺されている。なお近代以降では、本遺跡の至近東側に隅村窯跡が確認されている。

参考文献：矢富熊一郎『益田市史』昭和38年発行

矢富熊一郎ほか『益田市誌（上巻）』昭和50年発行

『日本歴史地名大系第三卷 島根県の地名』平凡社 1995年発行

神本常吉『日原町史（上巻）』昭和39年発行

神本常吉『津和野町史（第一巻）』昭和45年発行

石西郷土史及び税史編集委員会『石西ものがたり』但税とくらし 平成10年発行

### 3. 調査の概要

#### (1) 調査区の設定

調査対象地は、島根県益田市隅村町 148 番 1 ほかに所在し、そこは地名でいう丸山および家ノ下と



第3図 調査区配置図

いわれる場所である。昨年度には隣接する上段部の調査を行っていることから、同遺跡として扱い丸山遺跡と称名することとした。

当該地域は、北方向約 300m 地点を西流する四見川によって形成された広範な平野であり、肥沃な穀倉地帯であることは前述のとおりである。河川は蛇行しながら高津川に合流し、その右岸には国道 488 号線が東西方向に貫通して横田方面に至る。

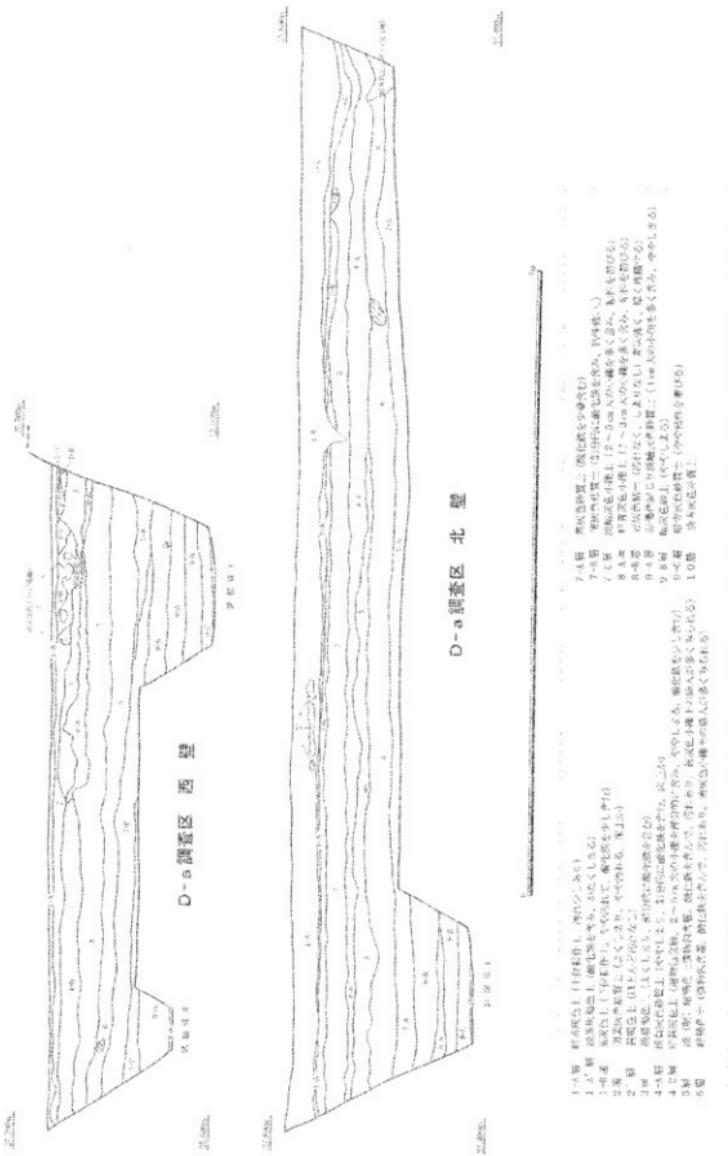
一方、南側背後には山地が迫って、なだらかに派生する山麓域には居住区が形成されている。山麓に沿って隅村橋から市道神田隅線が弧状に貫道し、国道 9 号線に合流する。

調査地点はこの平野部と住宅地との境界付近に位置するもので、平成 19 年度の調査面よりも北方向に 1 段ほど下がった地点に所在し、現地表面標高は 27.200m～27.600m、四見川との比高差約 2.0m を測った水田地に立地している（第 2～3 図・図版 1-1）。

なお同地点の西側には、約 2m 幅の工事用水路が既設されており、西側から逆 L 字状に北流



第4図 地区分図



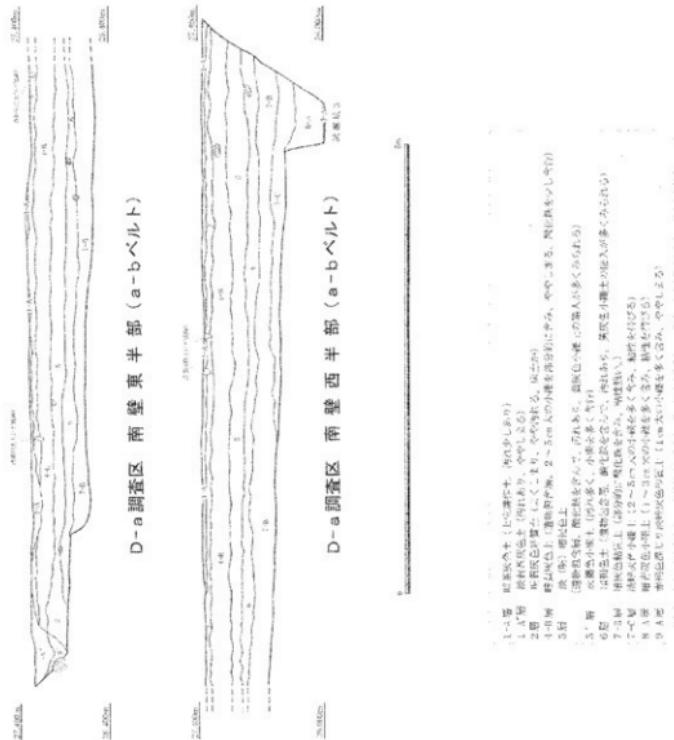
### 第5図 土層断面図（1）

している状況であった（第4図・図版1-2）。

調査区の設定にあたっては第一に水路に留意し、また調査区名については昨年度と同遺跡としてアルファベットの続きのD調査区から始めるとした。実際には水路の崩壊を防ぐためにその端部から1.5m～2mの距離を保つこととし、まずはそれ以東から設定している。

最初に水田の北側畔縁の西端部から1.5m地点を基点として、北端線と平行に北側上端約12m、また直交した南方向に西側左端約15mを設け、次いで東・南端畔縁に沿って、それぞれ東側右端約17m・南側下端約16mを測った台形状の調査区を設定した。この時点で調査対象区の大半を占め、さらに北側上端と平行して中央部に0.5mのセクションベルトを設けて2分割し、北側をD-a調査区、南側をD-b調査区としている。

最後に水路寄りの南側余地には、水路端部から2mの距離をもって南端畔縁に沿うように台形状の小区を設定してD-c調査区とし、D-b調査区間には同様にしてセクションベルトを設けている。このセクションベルトについては、D-a・b調査区間のものをa-bベルト、D-b・c調査区間をb-cベルトとそれぞれ称名することとした（第4図）。



第6図 土層断面図(2)

発掘調査は短期間での完了を目指して重機を併用しながら進め、まずは重機で1-A層(表土)除去を行い、人力作業を中心に精査を行った。最終的にはD-a調査区を約100m<sup>2</sup>、D-b調査区を約140m<sup>2</sup>、

D-c 調査区を約 30 m<sup>2</sup>の計約 270 m<sup>2</sup>の掘削面積をもって調査を完了している。

なお、以降に各調査区の概況を述べていくが、本遺跡においては、1-A 層：暗茶灰色土（上位耕作土、汚れ少しあり）、1-A' 層：淡

茶灰褐色土（酸化鉄を含み、

かたくしまる）、1-A'' 層：淡

黄茶灰色土（汚れあり、やや

しまる）、1-B 層：茶灰色土

（下位耕作土。やや汚れて、

酸化鉄を少し含む）、2 層：明

黄灰色粘質土（よくしまり、

やや汚れる。床土か）、2' 層

：黄褐色土（ほとんど汚れな

し）、3 層：淡暗褐色土（よく

しまり、部分的に酸化鉄を含

む）、4-A 層：淡黄灰色砂質

土（ややしまり、部分的に酸

化鉄を含む。床上か）、4-B

層：暗黃灰色土（遺物包含層、

2～5 cm 大の小礫を部分的に

含み、ややしまる。酸化鉄を

少し含む）、5 層：淡（明）暗

褐色土（遺物包含層。酸化鉄を

含んで、汚れあり。黄灰色

小礫土の陥入が多くみられる）

5' 層：灰褐色小礫土（汚れ

多く、小礫を多く含む）、6 層

：暗褐色土（遺物包含層。酸

化鉄を含んで、汚れあり。黄

灰色小礫土の陥入が多くみら

れる）、7-A 層：茶灰色砂質

土（酸化鉄を少量含む）、7-B

層：暗灰色粘質土（部分的に

酸化鉄を含み、粘性強い）、7

-C 層：淡暗灰色小礫土（2～

5 cm 大の小礫を多く含み、粘

性を帯びる）、8-A 層：暗青

灰色小礫土（1～3 cm 大の小

礫を多く含み、粘性を帯びる）、8-B 層：青灰色粘土（汚れなく、しまりなし）、9-A 層：赤褐色混じり

り淡暗灰色砂質土（1 cm 大の小礫を多く含み、ややしまる）、9-B 層：暗灰色砂土（ややしまる）、9

C 層：暗青灰色砂質土（やや粘性を帯びる）、10 層：淡青灰色粘質土、11 層：にぶい黄褐色粘質土（地

山土。汚れ多く、しまる。酸化鉄多く含む）という統一的な基本的層序に加えて、暗渠部については、

①層：淡灰褐色砂質土（暗渠排水埋土。しまり弱い）、②層：黄灰褐色粘質土（暗渠排水埋土。やや汚



第7図 土層断面図（3）

## (2) D-a 調査区の調査状況

本区は D 調査区の北側にあたり、他区に比べて最も深度を測る調査区である。基本的層序は、1-A 層の暗茶灰色土（上位耕作土）、1-A' 層の淡茶灰褐色土、1-A'' 層の淡黃茶灰色土、1-B 層の茶灰色土（下位耕作土）、2 層の明黄灰色粘質土（床土か）、2' 層の黄褐色土、3 層の淡暗褐色土、4-A 層の淡黃灰色砂質土（床土か）、4-B 層の暗黃灰色土（遺物包含層）、5 層の淡（明）暗褐色土（遺物包含層）、5' 層の灰褐色小礫土、6 層の暗褐色土（遺物包含層）、7-A 層の茶灰色砂質土、7-B 層の暗灰色粘質土、7-C 層の淡暗灰色小礫土、8-A 層の暗青灰色小礫土、8-B 層の青灰色粘土、9-A 層の赤褐色混じり淡暗灰色砂質土、9-B 層の暗灰色砂土、9-C 層の暗青灰色砂質土、10 層の淡青灰色粘質土という堆積状況であった（第 5・6・7 図）。

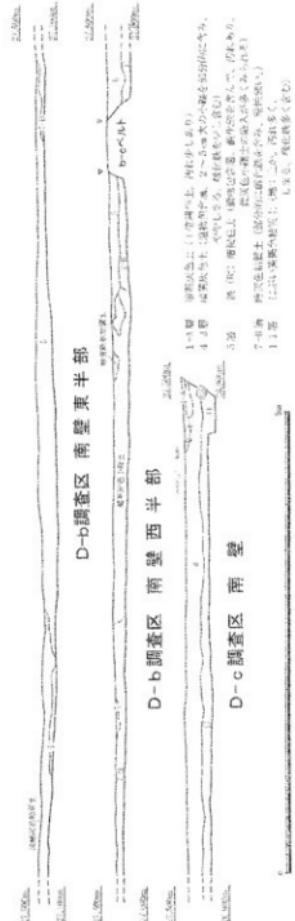
このうち 1 層から 4-A 層までは田間もしくはそれに伴う圃場整備（耕地造成）の層位と捉えられ、耕土や床上層の互層状況もみられるように、少なくとも過去に 2 度は実施されたと推定されて、その痕跡は区の北半に顕著であった。第 5 図の西壁中央には 3 層及び 4-A 層の尖滅部分がみられて、それが田畔畦境を示し、本区を二分する耕地の可能性を窺えるものであった。

出土遺物は 4-B 層からみられ始め、5・6 層で増加して、7-B 層で徐々に減少するといった様相が窺えた。このうち 4-B 層は南半部に限られるもので、層厚は南側に厚く 25cm 前後を測り、北方向に向かい薄層となる。5 層は西側及び南側に厚く 20~30cm を測って北方向に薄く、北半から東側に向かっては尖滅するが、その分 4-A 層が厚く堆積する傾向にある。逆に 6 層は北側に厚く 30 cm 前後を測って、南側に向かいやや薄くなる。本層には須恵器（Po01）や土師器（Po12）、青磁（Po08）などの遺物も含んでいる（第 10 図）。

以上までの上層のうち、4 層は比較的汚れではなく、逆に 5・6 層は汚れが多く、含まれる小礫は南側（もしくは南西側）に増加する傾向にあり、また黄灰色土ブロックの陥入や遺物の含入も多くみられることから、この 2 層については搅乱を伴う搬入（造成）上の可能性が高いものと考えている。

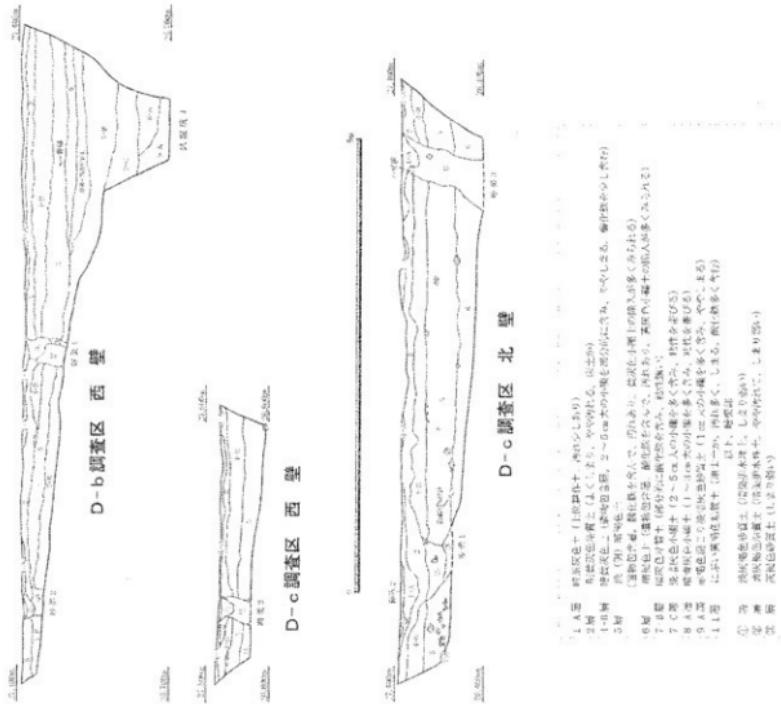
ここで東側に転じると、第 7 図のとおり過度の搅乱を呈した様相が見受けられる。多くは上・下層が混在したものと捉えられるが、東端部外側には水田用水路が敷設されており、その施工の際に生じた堆積層と考えている。

また 7 層から 10 層にかけては、ほとんどが無遺物層として捉えられた。7 層は三つに分層されるが、A 層は茶味帶びる砂質土で北端直前から発生し、本層以降から粘質性が強くなつて汚れも無くなる傾向にある。B 層は青味帶びる小礫層で、北端直前で尖滅する。この 2 層までで僅かに遺物がみられている。C 層は灰味帶びる小礫層で、西側に厚く中央あたりで尖滅する。次いで 8 層も二分層するが、主に小礫と粘土の含有の違いのみで、いずれも青味帶びて類似するもの。



第 8 図 土層断面図（4）

また9層も三分層するが、いずれも砂(質)性で類似する。そして10層は8-B層に類似する粘質土であった。この7～9層は南西側からの緩やかな傾斜に従って堆積する状況が看取されるとともに、流木1が7-B (もしくは7-c) 層に、流木2 (試掘坑2) も8-B層にみられることなどから、7層以下の上層については試掘坑1～3により、湿地もしくは河の影響による堆積層であり、時代は不詳であるが、至近にまで河が寄っていたものと判断された (第10図)。

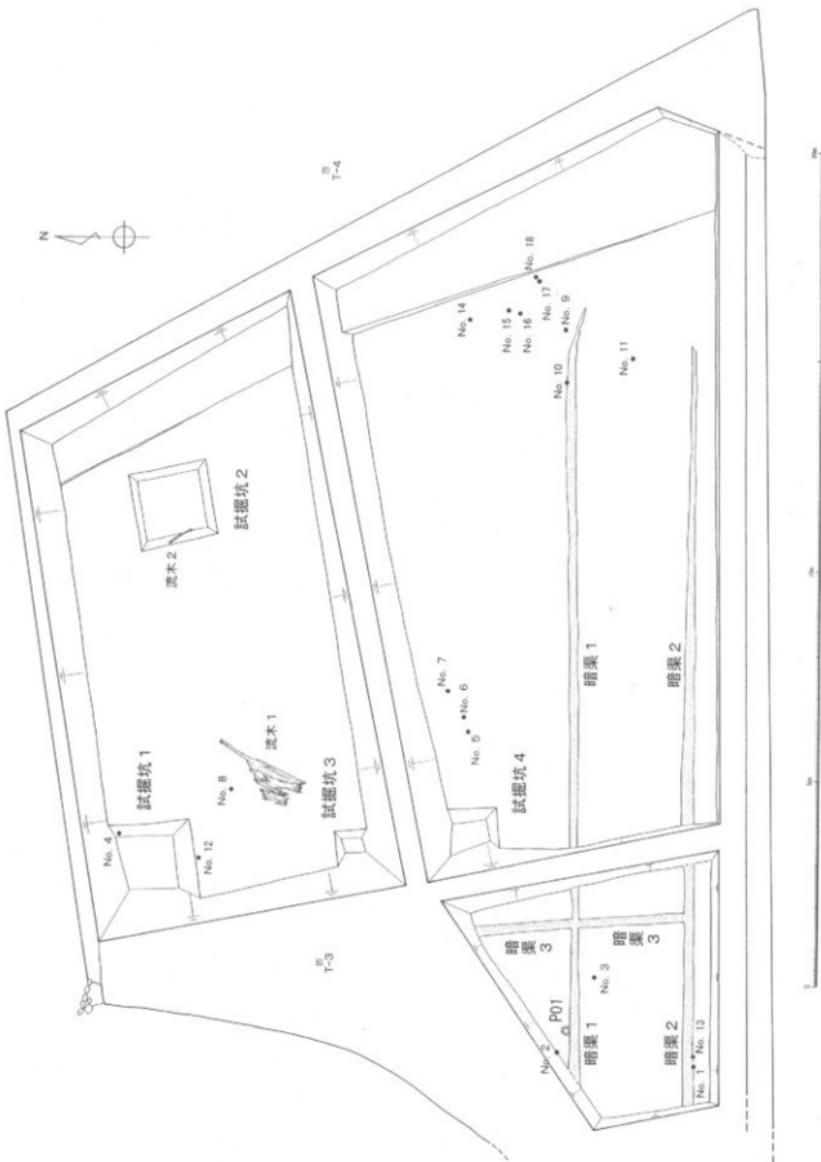


第9図 土層断面図 (5)

### (3) D-b 調査区の調査状況

本区は南側に位置して高位であり、最も遺物の多出した調査区 (とくに北半城) となる。基本的層序は、1-A層の暗茶灰色土 (上位耕作土)、1-A'層の淡黄茶灰色土、2層の明黃灰色粘質土 (床上か)、2'層の黄褐色土、4-B層の暗黃灰色土 (遺物包含層)、5層の淡 (明) 暗褐色土 (遺物包含層)、5'層の灰褐色小礫土、6層の暗褐色土 (遺物包含層)、7-B層の暗灰色粘質土、7-C層の淡暗灰色小礫土、8-A層の暗青灰色小礫土、9-A層の赤褐色混じり淡暗灰色砂質土を呈して、上質はD-a調査区に準じ、また暗渠部は①層の淡灰褐色砂質土、②層の黄灰褐色粘質土、③層の灰褐色砂質土などの理上と捉えられるものであった。

第9図で西壁をみると、全体的に南側に薄く、北方向に厚く堆積しているが、とくに4-B層から7-B層まで層種や層厚の増加は顕著であり、よって原地形 (地山層) は南側 (高位地) から北方向に緩傾斜を呈するものと推察される。この変位していく土層群はいずれも遺物包含層で、基本的にはD-a調査



第10図 調査区平面図

区に準じるものであった。

このうち4-B層は暗渠1を挟み、ほぼ水平に最大幅20cmを測って北半域に堆積する。遺物は僅少だが、北半に集中する様相がみられる。5層から遺物が増え始め、地形に沿って北側へ緩傾斜する。層厚10~20cmを測り、青磁などの貿易陶器や須恵器、土師器などの遺物がみられるようになる。また6層は北半端域のみにみられ、それ以降南側へは尖滅する。下層は暗茶灰褐色粘質土で恐らくは上・下層との混合土である。両者とも遺物包含層で、須恵器の甕・碗・横瓶(Po05・06・07)などが確認されていて、後者は本区のみにみられるものであった。

7-B層はD-a調査区と違い遺物が多くみられて、なかには僅かに弥生土器などもあれば、須恵器や貿易陶器もみられるなど、本区に限らず遺物包含層には時期の混在状況が多く見受けられるようである。本層も地形に沿って南側に薄く、北側で最大層厚40cmを測って厚く堆積するが(第8・9図)、この本城においては大きく皿状に深まりをもった様子が看取されて、一種の河もしくは湿地(沼)などの淀み的な場所と推定できるとともに、遺物も密集する状況が窺えて興味深い。一方、南端域は側溝の水の影響か青色を帯びて変色し、また図示はしていないが南城の本城下位は地山層に変わり堅くしまり、この層位は前述の皿状端部手前付近から北側に向かい、さらに低位へと降下していくものと想像された。

この7-B層の下位にまで至ると、遺物はみられなくなった。この時点で試掘坑4を設け、他区と同様に下位の状況を調査してみたところ、D-a調査区と同様の無遺物層(7-C層・8-A層・9-A層)の確認により、河等の影響による堆積層であるとして以降の掘削を止めている。

なお東側については第7図でみられるように搅乱的様相が強く、その理由は前述のとおりD-a調査区と同様である。但し、本区の東壁下層の暗茶灰褐色土は6層に類似するもので、その下位レベルの26.800m位からは東半域に集中して須恵器(Po09~10・14~18)や青磁碗(Po11)などの遺物も確認されている。

一方、遺構については第9図及び図10図のとおり、D-c調査区から延びる暗渠1と2を確認できた。南城において、南端に対し2条の平行線状に東壁付近まで延びるが、いずれも30~40cmの幅をもって最後には尖滅する。水田等の排水用地下埋設溝と考えられ、検出面は1-A層下面で、7-B層を貫通して地山層まで到達している。暗渠内部には、小枝をびっしりと充填して、枝身は白く水分をよく保つものであった。これらのことから、比較的新しいものと解され、恐らくは近代(明治?)以降のものと判断されたので、暗渠内部は侃削せずに表出して清掃のみで止めている。陥入埋土は三層ほど確認されたが、上・下層は砂質性及び中層は粘質性を帶びた封土であり、水捌けを考慮したものかもしれない。いずれにしても本地点域において、近年までの数次に係る水田造成の一端を窺えるものであった。

#### (4) D-c調査区の調査状況

本区は南西側にあたり、D調査区のうち最小で、精査も早くに完了した地点である。基本的層序は、1-A層の暗茶灰色土(上位耕作土)、2層の明黄灰色粘質土(床土か)、4-B層の暗黃灰色土(遺物包含層)、5層の淡(明)暗褐色土(遺物包含層)、6層の暗褐色土(遺物包含層)、11層の鈍い黄褐色粘質土(地山土)、また暗渠部では①層の淡灰褐色砂質土、②層の黄灰褐色粘質土、③層の灰褐色砂質土を呈してD-b調査区に準じている。

南端部は第8図のとおり、1-A層と4-B層は西端に僅かに残る程度で、その大半は5層で占めている。また第9図では北側に向かい2層の発生と4-B層がやや厚みをもって堆積する状況を看取でき、この4-B層から遺物がみられ始める。次ぐ5層は遺物を多く包含するようになり、下位部には須恵器(Po01)や白磁碗(Po02)、土師器(Po03)、青磁碗(Po13)などが確認されて、時期差をもって混在した出土状況を示している(第10図)。

この5層は南西側に向かって高位に推移するが、D-b調査区と同様に原地形に沿うものであり、西端南端隅では地山層となる11層もみられている。但し、北側へ向かうにつれ5層との間には6層が確認されて、遺物を僅かに伴しながらも厚みをもってD-a・b調査区へと続いている。直下の11層地山層

は堅く締り、平成 19 年度調査地方向から北及び北東方向に向かって、緩傾斜する状況が覗えたものであった。

なお遺構は、柱穴状のものが 1 基(P01)ほど 6 層と地山層との層界面に確認されている。形状は皿状を呈して、検出面標高 26.76m、深度 0.11m、径は 0.2m を測って共伴遺物はなく、判断の難しいものであった。また 1・A 層及び 2 層直下からは暗渠 1 と 2 が検出されて、その性格は D-a 調査区と同質のものである。さらに東端寄りには両者に直交して暗渠 3 も確認されるが、こちらも同質であり、陥入土の封土状況からはやや新しいものと判断されるが、いずれにしても時期幅の狭い近代以降のものとして捉えられた(第 10 図)。

本遺跡地は調査状況から推察すると、原地形として西南側から緩やかに派生する傾斜地に対して、時には削平して平地とし、あるいは数次に係る搬入や造成を行うなどの可耕地として活用されてきたものと考えられ、下位層から僅かにみられる弥生土器や土師器・須恵器・貿易陶磁器などの存在からは、旧くからの人間にとての生活好地であった状況を窺えるものであった。

#### 4. 出土遺物と周域の採取遺物

##### (1)はじめに

本発掘調査では、基本的には土層ごとに遺物を一括して採り上げているが、特徴的なものについてはPo遺物(No遺物と同義とする)として元位置記録法に従った採り上げを行っている。また、それ以外にも遺跡周域で採集したものがある。

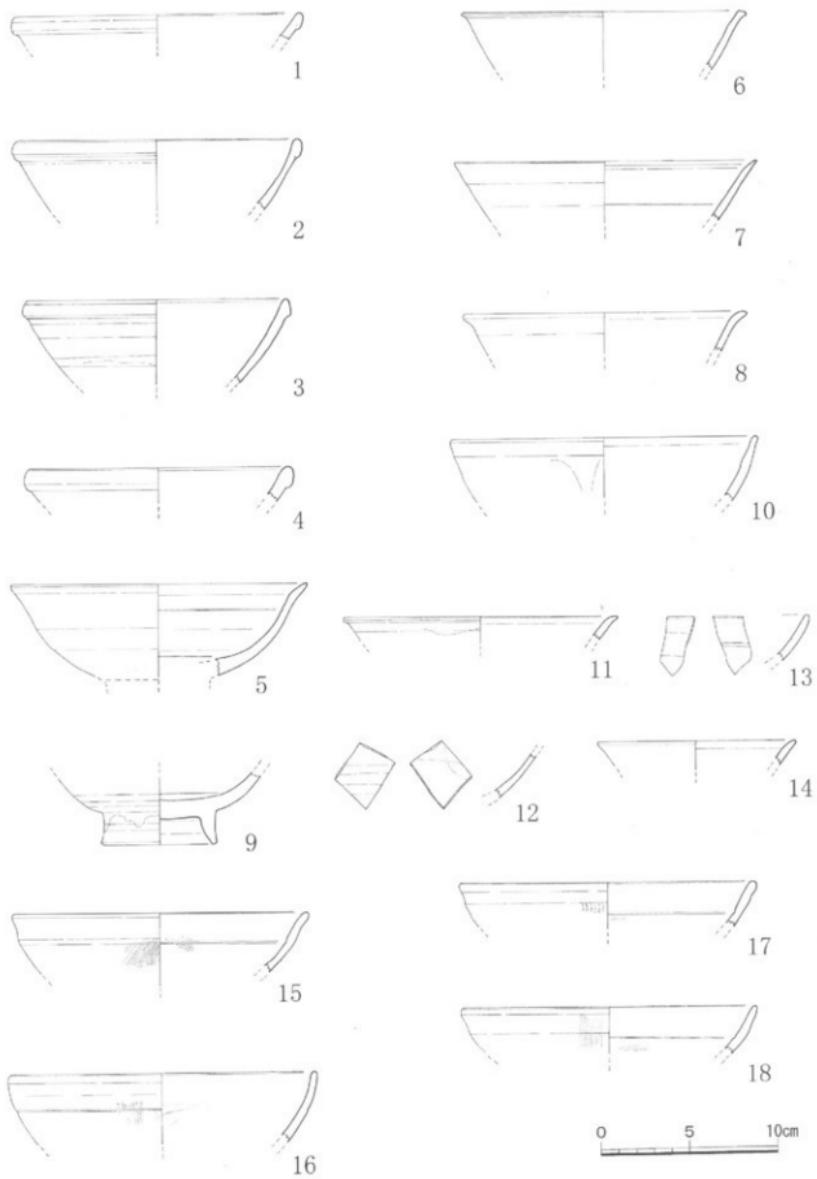
第2表のとおり、本遺跡から出土した遺物総数は1,200点余りを数えて、その内訳は土師器の684点(56.3%)が最も多く、次いで須恵器の238点(19.6%)、青磁131点・白磁64点・褐釉陶器1点で構成される貿易陶磁器類の196点(16.1%)、そして国産陶磁器の73点(6.0%)であり、ここまでで全体の97.9%を占めている。この他、僅少ではあるが、弥生土器8点、瓦質土器6点、土鍾3点、鉄製品(鉄滓など)3点もみられて幅広い時期差を窺えるものであった。

本遺跡では頗るな遺構は未検出であることから、当該期に係る具体的な生活址は浮き彫りにはできず、また遺物の出土した層位についても搅乱を帯びた搬入造成土の様相が強いものであって、数次の削平状況も看取できるものであった。このことにより、出土遺物から遺跡の性格を推察していくことになるが、その大半は中位層から下位層にかけて時期が混在して伴出するものの、弥生土器は下位面に集中する様相が窺われた。Po遺物(全18点)も主に下位層に検出されたもので、須恵器壺の大半のほか、青・白磁碗や土師器壺なども確認されている。

遺物の構成時期は、弥生土器の弥生時代(中期～後期)に始まり、土師器・須恵器などの奈良時代～平安時代前期を主体とするもの、また貿易陶磁器(青磁・白磁など)の平安時代後期～鎌倉時代を主体とするもの、そして国産陶磁器類などの近世期以降のものに大別されるが、数量からみれば奈良時代から鎌倉時

(D-a区)	土師器	須恵器	東播系 須恵器	青磁	白磁	褐釉陶器	国産陶磁器	弥生土器	瓦質土器	土鍾	鉄製品	種子	木材	炭化物	計	
1-A層	3	3		3	5				19			1			34	
2層					1										1	
4-B層	2	1		6	6				12			1			31	
5層	27	12		5	2							1			47	
6層	1				1										2	
7-B層	77	15		10	7				3			2			113	
	15	3											1	1	21	
(D-b区)	125	34	1	27	21		0	34	2	2	0	1	1	1	0	249
1-A層	2	8		8	4				19							41
4-B層	4	12		1					1							18
5層	75	24		15	5			2				1				122
5層	20	2		3	3				1							29
6層	203	74		40	18			4			2	1		2		344
7-B層	107	51	2	16	7			4	6		1	1		1		195
(D-c区)	411	171	2	83	37		0	31	6	3	1	1	0	0	3	749
4-B層	7	3		3				1		6						22
5層	115	22		17	4			2			1					162
6層	26	5		1	2											34
小計	148	30	0	21	6	1		8	0	1	2	1	0	0	0	218
計	684	235	3	131	64	1		73	8	6	2	3	1	1	3	1,216
周域採取遺物	土師器	須恵器	東播系 須恵器	青磁	白磁	褐釉陶器	国産陶磁器	弥生土器	瓦質土器	土鍾	鉄製品	種子	木材	炭化物	計	
計	258	27	0	15	9	0		107	22	0	1	5	0	0	0	444
合計	942	282	3	146	73	1		180	30	6	4	8	1	1	3	1,660
採上番号	出土区	出土層位	種	類	備考	採上番号	出土区	出土層位	種	類	備考					
Po01	D-c区	5層	須	青磁	青磁	Po10	D-b区	6層	青	青	青					
Po02	D-c区	5層下	須	白	白	Po11	D-b区	6層	磁	磁	青磁破片(Po13と接合)	青	青	青	青	
Po03	D-c区	5層	土	褐	褐	Po12	D-b区	6層	釉	釉	青釉破片(Po13と接合)	青	青	青	青	
Po04	D-b区	6層	須	青	青	Po13	D-b区	5層下	青	青	青釉破片(Po11と接合)	青	青	青	青	
Po05	D-b区	6層	須	青	青	Po14	D-b区	5層	青	青	青釉破片(Po11と接合)	青	青	青	青	
Po06	D-b区	6層	須	青	青	Po15	D-b区	6層	青	青	青釉破片(Po11と接合)	青	青	青	青	
Po07	D-b区	6層	須	青	青	Po16	D-b区	6層	青	青	青釉破片(Po11と接合)	青	青	青	青	
Po08	D-b区	6層上	青	青	青	Po17	D-b区	6層	青	青	青釉破片(Po11と接合)	青	青	青	青	
Po09	D-b区	6層	須	青	青	Po18	D-b区	6層	青	青	青釉破片(Po11と接合)	青	青	青	青	

第2表 遺物集計表



第11図 出土遺物実測図(1)

代までを盛行期として扱うことができる。また後述する岡城からの採取遺物も含めると、時期幅と数量もやや広がりをみせ、原始から的人類の営みがみられる本遺跡地は、さらに広がりをもっていた可能性も窺うことができた。以下、特徴的な資料を中心にみていくこととする。

## (2) 実測遺物

1~47は中世前期の貿易陶器類で、1~14は白磁、15~46は青磁、そして47は褐釉陶器である(第11~13図・第3表)。

まず白磁は、胎土・釉色ともに灰白色を呈し、13・14以外は碗で口縁部片が多く、9は高台部片、12は体部片であった。1~4の口縁部は玉縁状、5~8は外反を呈するもので、このうち1・4の断面は半楕円形を呈して縁下端は折込み、5・7の内面には斜口面、6の端頂部には平坦面をそれぞれ有して、とくに7は口壺で端部は尖っている。いずれも体上部は逆「ハ」字状に開くが、3・5は内湾気味に、7は直線的に立ち上がっていいる。

また9(Po02)は底部片で、小さく外反する高い高台内は無釉(露胎)であり、体部は内湾して立ち上がるるもの。10は端部がやや尖り気味で外面に釉垂れがみられ、11は端反りを呈して端部は水平に屈折し、鳥嘴状に小さく突出している。12は体下半部片で、内面には弧状文もしくは円弧文を施している。

13~14は皿と想定されるもので、前者は内湾気味に大きく開いて内面に太い沈線をもち、後者は口縁部がやや外反気味となるものである。

白磁は10の碗X I類が最古のもので、次いで1は碗II類、2~4は碗IV類、5・6・9は碗V類、11は皿X II類、そして12は碗X II類であり、7・8は碗IX類及び14は皿IX類であると考えられ、11世紀後半~12世紀後半を中心とするものである。

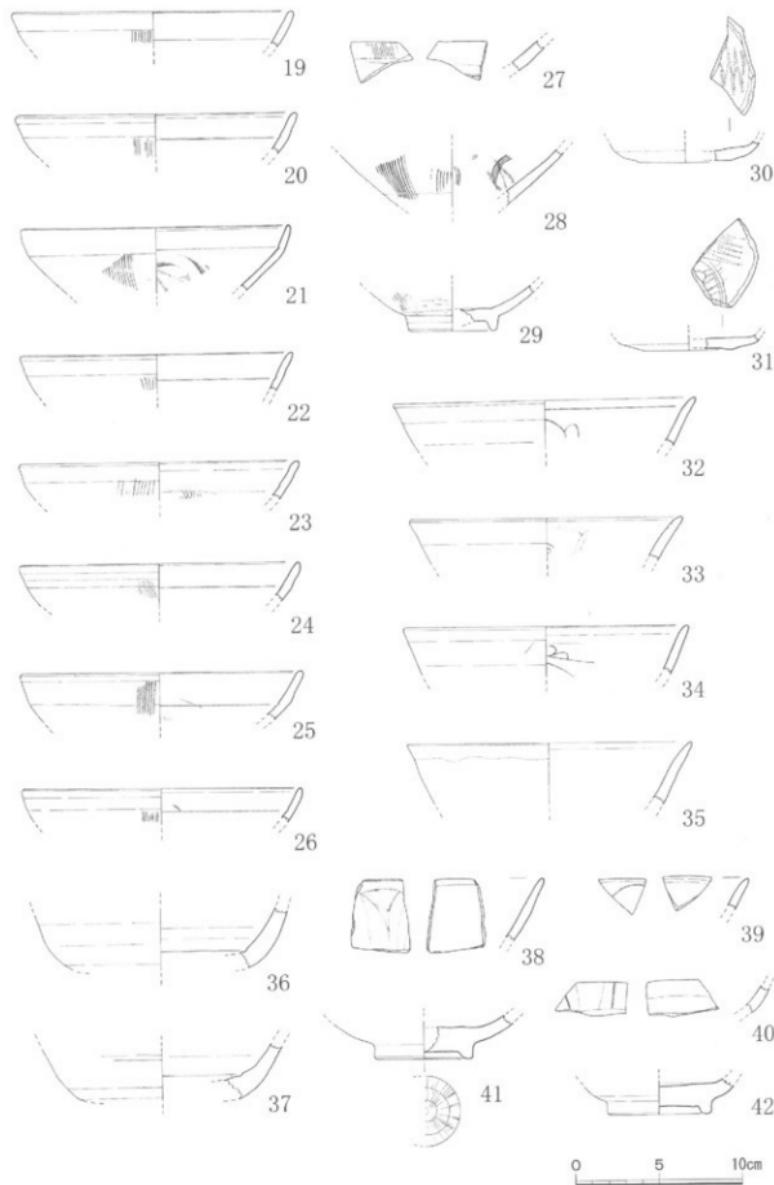
一方、青磁は15~31が同安窯系のもので、釉調は灰オリーブ色、胎土は灰白色を呈し、そのうち15~29は碗、30・31は皿である。また15~26は口縁部片、27~28は体部片、29~31は高台部片であり、21は口縁部にて逆「ハ」字状に屈曲して立ち上がり、25も緩い屈曲をなす。そして高台部29の端付部はやや丸みを帯び、無釉(露胎)であって、高台から腰部にかけて回転ケズリ(左→右)が施されている。いずれも内・外面もしくは両面に櫛齒状工具で多条線文を施すもので、1・24・27・30の外面には平行斜線文、18~20・22・23・25・26・29には垂直平行線文、また17などの平行弧線文も僅かにみられる。また内面には1条あるいは2条の沈線のあるものが多く、他方では21・28・30・31などの櫛によるジグザク文様やヘラ描き文も多くみられている。

同安窯系青磁は、1のI類の他は分類不詳であるものの、その流通時期から大半は12世紀後半代のものと思われる。

また青磁の32~46は龍泉窯系のもので、釉調は灰オリーブ色もしくはオリーブ黄色、胎土は灰白色を呈して、いずれも碗と考えられるもの。このうち32~35・38・39は口縁部片、36・37・40は体部片、41~46は高台部片であり、体部から口縁部にかけては逆「ハ」字状に立ち上がって、強くあるいは緩く内湾している様子が窺われる。

口縁端部では32・39は尖り気味に、35は片刃状に仕上げられたものもみられる一方、高台部は36・41~43・45の器壁は厚く、また41~44はやや低めの形状(削り)で、42(Po08)を加えた断面は方形状を呈している。豈付部分には無釉・施釉の両方がみられ、そこから高台内へは無釉のものが多く、また43の端部外は面取りが施され、45には端部内外にそれが施されたため、断面は凸レンズ状を呈している。

内・外面上には沈線や文様のみられるものが多く、34の外面には恐らくは櫛状工具の刺突によるRL細線や37の2条の沈線、38・40の鏽蓮弁文(40は片切り)や39の蓮弁文など、また内面には32・34の口縁下に劃画文や33の片刃による複数の曲文(区画文)や花文と想定されるもの、そして底・体部境には36・37・42~44・46(Po 11・13)のように圓線や沈線がみられている。41の高台内天井部には工具による放射状の削り跡が、また46の見込み底にはヘラによる草花文(片切りか)なども遺される(図版5・1)。



第12図 出土遺物実測図（2）

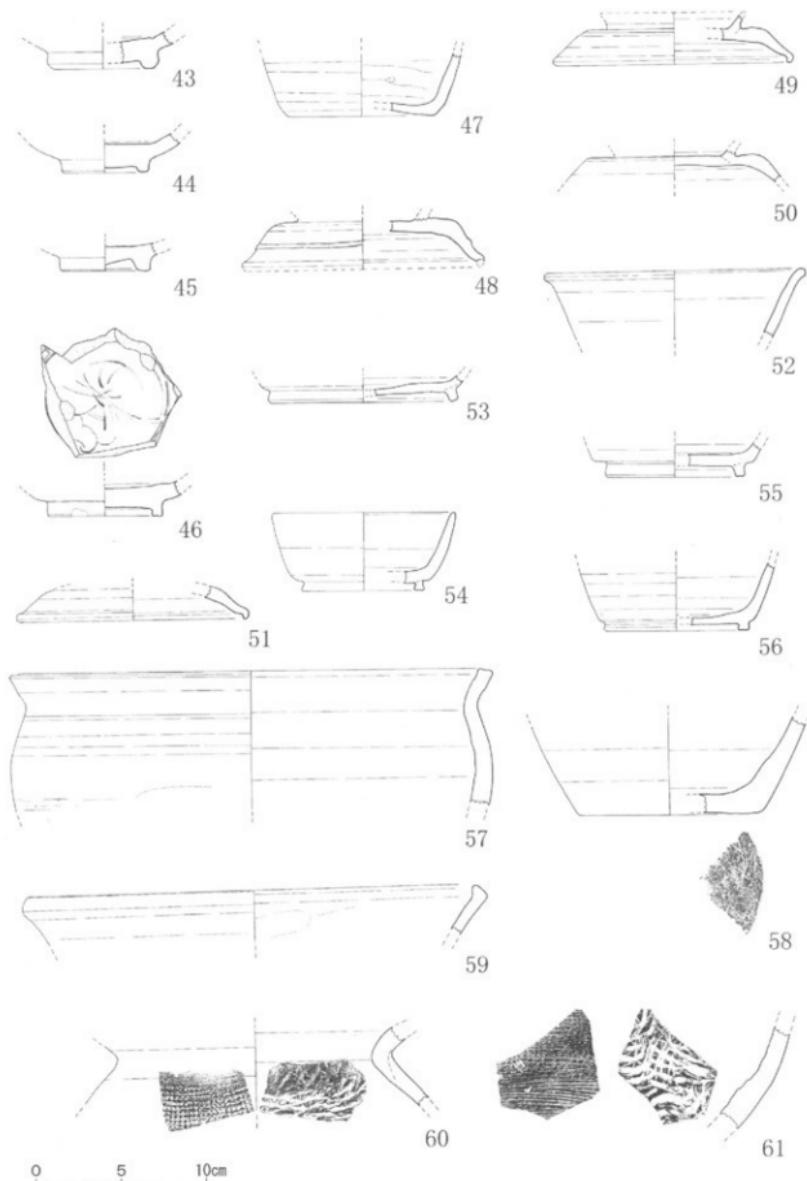
出土地点		備考	出土地点		備考
1 白磁 瓢	16.0	D-bKc 6脚	灰白色 D型	52 茶器皿	身舟 15.0 D-bKc 4脚上～中
2 白磁 瓢	16.0	D-bKc 6脚上～中	灰白色 IV型	53 茶器皿	身舟 (11.0) D-bKc 4脚上～中
3 白磁 瓢	14.5	D-bKc 6脚上～中	灰白色 IV型	54 茶器皿	身舟 (11.0) D-bKc 4脚
4 白磁 瓢	14.5	D-bKc 6脚	灰白色 IV型	55 茶器皿	身舟 (8.0) D-bKc 4脚及底足上
5 白磁 瓢	15.5	D-bKc 6脚上～中	灰白色 二次的被燒 V型	56 遺物	身舟 (8.2) D-bKc 4脚
6 台盤 瓢	16.0	D-bKc 6脚上～中	灰白色 V型(?)	57 遺物	身舟 (8.0) D-bKc Ph.09
7 白磁 瓢	17.1	D-bKc 6脚上～中	灰白色 白口 IV型(?)	58 遺物	身舟 (10.0) D-bKc 5脚上
8 白磁 瓢	16.0	D-bKc 6脚上～中	灰白色 IX型	59 遺物	身舟 (21.0) D-bKc 6脚上～中
9 合掌 瓢	(9.5)	D-bKc 3脚 Ph.02	灰白色 V型	60 遺物	身舟 —
10 白磁 瓢	17.0	D-bKc 6脚上～中	灰白色 X型	61 遺物	身舟 7～8脚
11 白磁 瓢	15.4	D-bKc 6脚上～中	灰白色 相模X型	62 遺物	身舟 (14.0) D-bKc Ph.09
12 台盤 瓢	—	D-bKc 4脚上～中	灰白色 VII型	63 遺物	身舟 大型 —
13 白磁 瓢(?)	—	D-bKc 6脚上～中	灰白色	64 遺物	身舟 大型 —
14 白磁 瓢	11.2	D-bKc 6脚上～中	灰白色 IX型	65 遺物	身舟 (14.0) D-bKc 6脚上～中
15 青磁 瓢	16.6	D-bKc 6脚上～中	同安窯系	66 上部器	高台付脚 (7.2) D-bKc T-3脚
16 青磁 瓢	17.0	D-bKc 6脚上～中	同安窯系 I型	67 上部器	身舟 (8.0) D-bKc Ph.12
17 青磁 瓢	16.7	D-bKc 6脚上～中	同安窯系	68 上部器	身舟 (8.2) D-bKc 7～9脚
18 青磁 瓢	16.6	D-bKc 6脚上～中	同安窯系	69 上部器	身舟 (13.0) D-bKc 5脚上～中
19 青磁 瓢	16.5	D-bKc 6脚上～中	同安窯系	70 上部器	身舟 (14.0) D-bKc 7～9脚
20 青磁 瓢	15.5	D-bKc 6脚上～中	同安窯系	71 上部器	身舟 (14.0) D-bKc 4～5脚
21 青磁 瓢	15.6	D-bKc 6脚上～中	同安窯系	72 上部器	身舟 (14.0) D-bKc 4～5脚
22 青磁 瓢	16.0	D-bKc 6脚	灰オーラー色 同安窯系	73 上部器	身舟 (12.2) D-bKc 4脚上～中
23 青磁 瓢	16.4	D-bKc 6脚	灰オーラー色 特殊器系	74 遺物	身舟 —
24 青磁 瓢	16.4	D-bKc 6脚	オーラー灰 同安窯系	75 佚生上部	身舟 (身舟) D-bKc 7～9脚
25 青磁 瓢	17.0	D-bKc 5脚	灰オーラー色 同安窯系	76 佚生上部	身舟 (身舟) D-bKc 6脚上～中
26 青磁 瓢	16.6	D-bKc 5脚	灰オーラー色 同安窯系	77 壁面土器	身舟 (身舟) D-bKc 7～9脚
27 青磁 瓢	—	D-bKc 6脚上～中	灰オーラー色 同安窯系	78 瓦夏 星足	身舟 (24.0) D-bKc 4脚上～中
28 青磁 瓢	—	D-bKc 6脚上～中	灰オーラー色 同安窯系	79 瓦夏 上舟	身舟 —
29 青磁 瓢	(5.2)	D-bKc 5脚下	灰オーラー色 同安窯系	80 五貫 破片	身舟 (22.2) D-bKc 5脚上～中
30 青磁 瓢	(5.4)	D-bKc 6脚	灰白色 同安窯系	81 五貫 足頭	身舟 —
31 青磁 瓢	(5.0)	D-bKc 6脚	明オーラー色 同安窯系	82 佚生上部	身舟 (身舟) —
32 青磁 瓢	18.0	D-bKc 6脚	明オーラー色 同安窯系 I型	83 佚生上部	身舟 (身舟) D-bKc 7～9脚
33 青磁 瓢	16.2	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系 I型	84 佚生上部	身舟 (身舟) D-bKc 6脚上～中
34 青磁 瓢	17.0	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系 I型	85 佚生上部	身舟 (身舟) D-bKc 6脚上～中
35 青磁 瓢	17.0	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系 I型	86 上部器?	身舟 (7.0) —
36 青磁 瓢	—	D-bKc 5脚上～中	オーラー灰 同安窯系 I型	87 佚生上部	身舟 (身舟) 腹部付
37 青磁 瓢	—	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系	88 佚生上部	身舟 (身舟) 腹部付
38 青磁 瓢	—	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系	89 佚生上部	身舟 (身舟) 腹部付
39 青磁 瓢	—	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系	90 五貫	身舟 (身舟) 12.6 腹部付
40 青磁 瓢	—	D-bKc 5脚	オーラー灰 同安窯系	91 1脚器	身舟 (身舟) —
41 青磁 瓢	(5.8)	D-bKc 5脚	オーラー灰 同安窯系	92 五貫	身舟 (身舟) —
42 青磁 瓢	(6.2)	D-bKc 5脚	灰白色 IV型	93 五貫	身舟 (身舟) 15.1 腹部付
43 青磁 瓢	—	D-bKc 6脚	灰白色 IV型	94 五貫	身舟 (身舟) 14.0 腹部付
44 青磁 瓢	(5.0)	D-bKc 6脚上	オーラー灰 同安窯系	95 2脚器?	身舟 —
45 青磁 瓢	(5.2)	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系	96 青磁	身舟 (11.0) (5.5) 腹部付
46 青磁 瓢	(5.0)	D-bKc 6脚上～中	オーラー灰 同安窯系	97 遺物	身舟 (10.0) 腹部付
47 青磁 瓢	(5.5)	D-bKc 4～5脚	褐斑 破片	98 五貫	身舟 (10.0) 腹部付
48 青磁 瓢	—	D-bKc 5脚上～中	灰白色 IV型	99 斧器	身舟 (身舟) (5.0) 腹部付
49 青磁 瓢	(14.0)	D-bKc 6脚	灰白色 IV型	100 銅製品	身舟 (身舟) —
50 青磁 瓢	—	D-bKc 5～7脚	灰白色 IV型	101 銅製品	身舟 (身舟) —
51 銅製品	身舟	—	—	102	身舟 (身舟) 21.0

### 第3表 実測遺物観察表

龍泉窯系青磁は分類できるもので 32・33・35・36・46 は碗 1種と考えられて、その他についても恐らくは 12 世紀中頃から 14 世紀初頭にかけてのものが多いと推定される。

47 は被熱した褐釉陶器の壺で、やや上げ底状を呈し、体部は小さく外傾する。釉色はやや黄味を帯びた白濁色で、胎土は濃褐色を呈する。中国もしくは朝鮮半島で 15～16 世紀につくられたものと推定される。

48～65 は須恵器であり(第 13・14 図・第 3 表)、いずれも胎土は灰色を呈して回転ナデの仕上げが施されるもの。器種は 48～51 の壺蓋、52～56 の壺身、57・59 の鉢、61 の壺、58 は鉢か壺の底部と思われ



第13図 出土遺物実測図（3）

るもの、また 62 は横瓶、60・63～65 は甕類に分類される。

このうち坏蓋は、いざれも輪状つまみのものと想定されるもので、削りが施された天井部は広く平坦となる一方で、体部へは強く屈曲して移行し、「八」字状に開くものが多い。また口縁部は小さく内傾に折れ、下垂して鳥嘴状におさまるものは 48・49・51 にみられて、また 48 の外面には過度焼成による重ねた上物の端部付着が認められる。いざれも 9 世紀前半のものと考えられる。

坏身のうち 52 は高台付と想定されて、口縁端部で短小に外反し、人念な回転ナデが施される金属器模倣品と思われるもので、55 もその可能性をもち、底・体部境は角張るもの。また 53～56 は高台は低く、体部は逆「八」字状に開き、52 は直線的に開いている。いざれも若干の時期差はあるものの、8 世紀末～9 世紀前半までのものである。

鉢の 57(Po 09)は、口頭部は緩く逆「八」字状に開いて立ち上がり、端頂部は斜めに平坦面をもつもので、また 59 は東播系のこね鉢となり、口縁端部は肥厚気味に逆「く」字状に屈折する。前者は奈良～平安、後者は 12 世紀～13 世紀のものである。また底部片の 58 は、体部との境界の稜線は明瞭であり、平安期でも古いものと思われる。

61 の壺は外面にカキ目状の回転痕、内面に同心円叩き文をもち、緩く内湾気味に開く平安期のものだろう。また口頭部を逆「八」字状に開いて立ち上がる 62(Po 06)は横瓶であり、外面に平行叩き目やカキ目、内面に同心円状の叩き目をもつものである(図版 4-2)。

甕の 60 の口縁部は強く外反し、頭部は「く」字状に屈曲して、この傾向は 63 にもみられている。前者の外面には体上部に繩席文状の叩き目、内面には同心円状の叩き目を、また両面の上方にはナデ消し痕を窺える。後者は 64 とともに大甕であり、板状工具による回転ナデ痕がみられて、64 には外面に平行叩き目のうち横方向のナデ痕、内面には同心円状の叩き目がみられている。これは 65(Po 07)にも共通して、外面はカキ目とも観察されるものである。

時期不詳のものは多いが、63 は平安末期～中世にかけてのものと思われる。

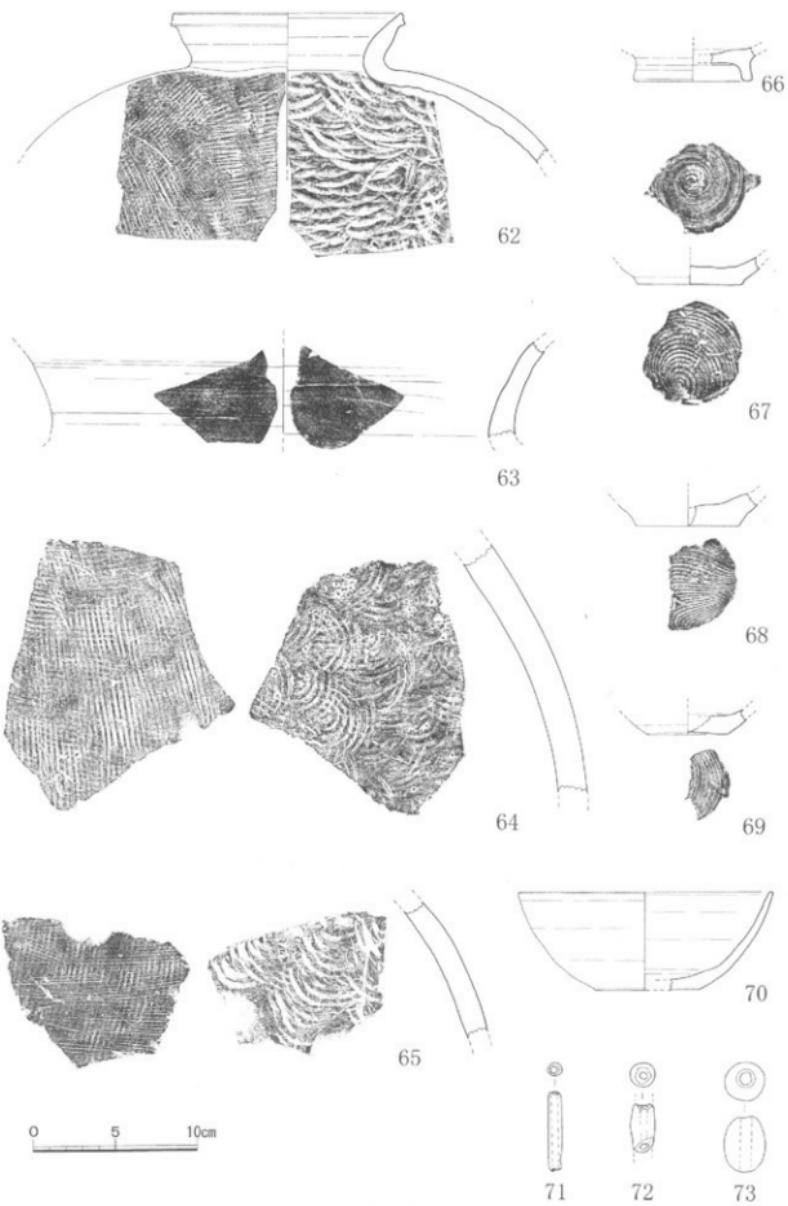
土師器の 66～73 は、胎土は純い黄褐色を呈し(第 14 図・第 3 表)、66 は高台付高坏、67～69 は坏、70 は塊、71～73 は土錘で、器種にはいざれも内・外ともに回転ナデが施されている。

このうち 66 は平安期のもので、高台は高く、やや「八」字状に開くもの。坏はいざれも平底で、底部と体部との境界の稜線があり、また立ち上がりは僅かに絞るもので、67(Po 12)・69 は回転糸切り痕、68 は静止糸切り痕がみられる(図版 4-3)。塊の 70 は平底で、体部は緩く内湾して立ち上がり、逆「八」字状に開いて口縁部へ移行する。口縁端部は小さく尖り気味でおさめ、また内・外ともに轆轤整形痕を人念に横ナデして消し、化粧塗を施す一方で、底部も回転糸切り痕をナデ消している。おそらくは平安期の入念なつくりの上物であろう。土錘は、細長の管状のものは 71・72 であり、73 はやや張った緒円状を呈して、漁労用の錘として使用されたものと思われる。

以降は、僅出な中でも特徴的なものを説明する。

74 は備前焼の壺で、玉縁状の口縁部をもつもの。内・外面は回転ナデを施し、胎土は褐灰色を呈する。75・76 は弥生土器で、色調は灰黄褐色～淡黄褐色を呈するもの。前者は甕の底部で体部は外傾して開き、また風化のため判然としないが、外面は磨き、内面はハケ調整が施されたもので、おそらくは弥生中期後半のものだろう。後者は高坏の脚の上半部であり、弥生後期の可能性の強いものである。

77 は朝鮮系の無紋土器と想定されるもので、甕か鉢の口縁部である。太い玉縁状の口縁をもち、頭部から体上部にかけて「八」字状に開き、時期は弥生前期末葉ごろと推定される。そして 78～81 は瓦質土器で、いざれも灰白色～黒褐色を呈するもの。78・81 は足錠でスヌが付着し、内・外ともヘラもししくは板状工具で(横)ナデが施されている。そのうち前者は頭部で浅く「く」字状にくぼみ、口縁断面は三角形状を呈し、また端部外斜面も抑えナデにより浅くくぼむ。中世の 14 世紀～15 世紀のもの。79 は上錠と想定される口縁部で、体部は「八」字状に開いて、端部の外側下端は膨らみをもって、断面は三角形状を呈する。80 はすり鉢で、口縁部は僅かに肥厚し、外側に内傾斜面をつくる中世のもの。外面



第14図 出土遺物実測図(4)

には磨き、内面はハケ目(斜め)や磨り目、3条一単位の斜目跡もみられるものである。



74



75



76



77



78



79



81



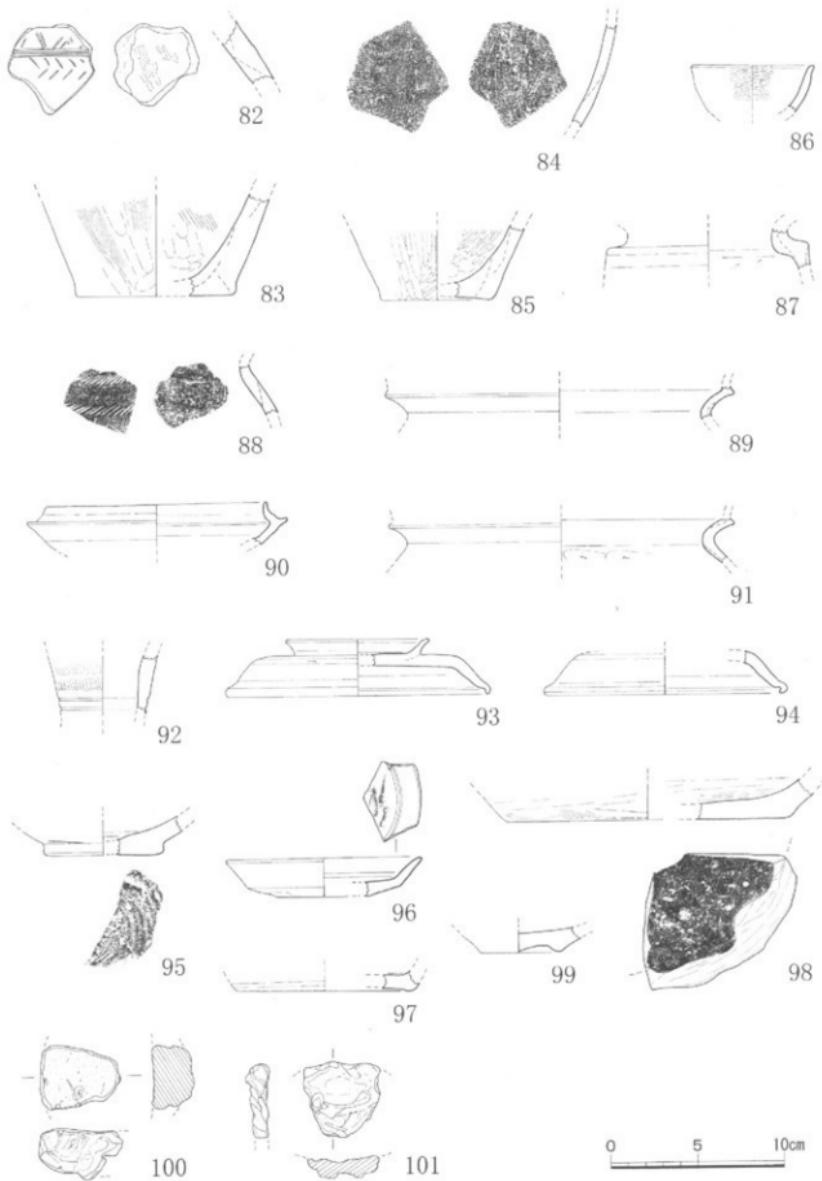
第15図 出土遺物実測図(5)

### (3) 周域からの採取遺物

本説明資料は指呼範囲の西域一帯を踏査して得られたものであり、主には調査地点の西端に既設された工事用水路の残土山から採集したものである。総数は444点を数えて多く、平成19・20年度調査遺物とほぼ共通するものが確認されたことから、本遺跡の関連遺物として取り扱うこととし、以下特徴的なものを抽出して詳述することとした(第3・16図、第2・3表)。

まず82~85・87~89は弥生土器で、82は壺、83~85・88・89は甌、87は鼓形器台である。その82は胎土は鈍い黄褐色を呈し、外面には3条の平行沈線を挟んで、上方に複線鋸歯文、下方に無軸羽状文がみられる。施文具は貝殻の縁を使用したもので、内面には磨きが施され、I~2期まで遡るもの。83もI期のもので、平底であり、底・体部境には稜を有して、体部は外傾して開いている。外面には縦方向にハケやナデ、底面は磨き、内面にもハケ・ナデ痕を確認できる。84は内面に削りのちハケがみられたIV期のもので、85の外面は縦方向の磨き、内面の磨きやナデが顕著なもので、両面に焼成時の黒斑か焦げ状のススが付着する。底部は僅かにくぼんだ平底で、83と同様の形態を有するIII期のものと思われる。

87は器台の筒部~台部片で、外面は横ナデ、内面は削りがみられるもの。筒部は逆「コ」字状に強く外反し、複合部は直角に折れ曲がり、台部は反り気味に小さく開く。V~3期のもの。88は「八」字状に開く体上部片で、外面には貝殻腹縫による2段の連続刺突文、中間と文様下部には横ナデ、また内面に削りが認められるV~4期のものである。89は複合口縁部で、複合部は小さく水平方向に突出し、頸部は「く」字状に屈曲する。大木式の可能性をもつもの。



第16図 採取遺物実測図

86・91・95は土師器である。86は小型の杯で深みがあり、体部は内湾気味に小さく聞く。口縁部は僅かに外反して、恐らくは古墳前期のものか。また91は複合口縁を有する甕の頸部である。形態は89と同様で、外面に横ナデ、内面は頸部に横ナデ、体部に削りがみられ、大木式もしくは小谷式と想定される。95は83と形態が類似するが、底面部は高台状に絞って立ち上がる。内・外面に回転ナデが施されて、底面にはやや粗い回転糸切り痕が認められる。

また90・92～94は須恵器で灰色を呈する。90は蓋杯の身で、体部はやや内湾気味になり、大きく聞いて受け部へと続く。受け部は短く斜め上方に突出する。立ち上がりは反り気味に内傾して端部は尖るもの。内・外面とも横ナデを施した扁平な器形であり、山木Ⅲ(芝期)の古墳後期ものである。92は長頭巻の頸部下半片で、やや外傾する7世紀後半のもの。内面はナデ、外面は板状工具による連続刺突痕や下方に2状の沈線が認められる。93・94は坏蓋で奈良末～平安前期にもの。いずれも輪状つまみを有して、体部は「八」字状に下降し鳥嘴状の口縁部におさめている。内・外面とも回転ナデが施されて、前者は口縁付近に重ね旋耕跡が遺り、天井部は広く入念に削られたもの。また後者の端部はやや内向きである。

そして96は同安窯系青磁皿である。胎土は灰白色、釉色はオリーブ灰色を呈するもので、体中部位で屈曲し、見込み境に段を有する。また体部下半と底部は無釉で、見込みには櫛によるジグザグ文様を施した皿I類に分類されるものである。97は褐釉陶器壺の底部で、中央がややくぼむ平底となる。釉色は外面の灰黄褐色、内面は濁った黄褐色を呈する。

98は瓦質土器の鉢で、内・外面とともに灰白色を呈し、ハケ・ナデが認められるもの。平底は大径で、体部境には稜をなす。99は唐津焼の壺もしくは皿で、底部の外面中央が凸レンズ状に膨らみ、高台は低いもの。胎土は黄褐色、釉色も黄褐色を呈する江戸時代初期のものである。

最後に100・101は鍛冶滓である。恐らくは近くで営まれていた鍛冶場の遺物と想定されるもので、それぞれ67gと21gを量っている。

以上、本章も含めて元島根大学教授の田中義昭氏には多くのご教示を頂いている。ここに記して謝意を表すものである。

- 参考文献：正岡蔵大・松本岩雄 編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰一』1992年5月 木耳社  
山陰考古学研究集会『山陰における中世前期の貿易陶磁器』1998年8月  
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年12月 真陽社  
大庭康時・佐伯弘次ほか『中世都市・博多を掘る』2008年3月 海鳥社

## 5. 小 結

第17図のとおり、本地点域は蛇行する匹見川下流域にあたり、それによって形成された肥沃な農耕(水田)地帯であることは折に触れて述べたところであるが、その分洪水禍にも多く晒されてきた地域ともいえる。また現在の畦畔は、河川沿いに平行もしくは蛇行した形状をもって配列していることからも、地点域近くまで河川が寄り、永い年月をかけて現在の河川位置にまで移動していくた推測は平成19年度調査報告書でも述べたところである。

付け加えると、地形的に隅丸山八幡宮から隅村橋に至る地点域が河川の蛇行点であり、そこから西側の山地までに大きく内湾する平野部は、勢いの落ちた河川の形成による、いわゆる澱み的な様相をもつた湿地帯であった可能性が高いようだと思ふ。丸山遺跡は立地的に山地寄りの最も深い地点域に位置しているのも興味深く、おそらくは安定した地点域であったものと考えている。

前年度に加え、この度の調査からも少なからず弥生土器が確認されているが、それは水稻が定着していた弥生時代から人びとが住みつき、集落を形成して低湿地を可耕利用したことを物語るものである。さらに古墳時代を経て、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物出土量は増大する。反面、14世紀から16世紀にかけての遺物量は減少するが、近世以降はまた国産陶磁器を中心みられるようになっていく。

この2ヶ年の調査で確認された遺物は約2,400点にのぼるが、これは弥生時代～近世期までの系統的な人類の営みを示唆するものであり、遺跡地一帯は山河の幸を得られる生活好地としての条件を旧くから備えていたものと解される。

一方、前述の蛇行点から始まる山麓一帯はしっかりした台地であると捉えられることから、旧くから人びとは眼下に水田(可耕)地帯をおさめつつ、居住は当該区域のいずれかに求めたのではないかと想像している。また遺物の観点からは、とくに平安期～鎌倉期に盛行が認められることから、当該期において地域の支配階級者もしくは地侍級の居館が近くに存在していた可能性を窺えるもので、恐らくは現在の居住区をなす山麓一帯でも、八幡宮から平成19年度調査地点までにかけて存在していたものと推定している。

このように、隅地区の人びとの営みを示唆する多くの貴重な資料が得られたことは本発掘調査の有意義な成果であったといえ、このたびの所見をもってひとまずの小結に代えるとともに、また更なる地域史の解明について、今後の調査・研究に期待するものである。



第17図 俯瞰した事業範囲地形図



1. 西側からみた調査地点（遠景）



2. 西側からみた調査地点（近景）



3. D-b 調査区5層の表出状況



1. D-c 調査区 4-B 層の表出状況



2. D-a 調査区 6 層の表出状況



3. D-b 調査区 7-B 層の表出状況



1. D-c 調査区 5・6層の表出状況



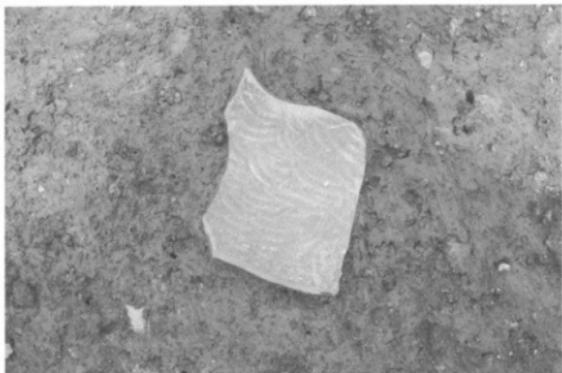
2. D-a 調査区の土層堆積状況（北壁）



3. D-b 調査区の土層堆積状況（西壁）



1. D-c 調査区の土層堆積状況（北壁）



2. Po06（須恵器・横瓶）の検出状況



3. Po12（土師器・壺）の検出状況



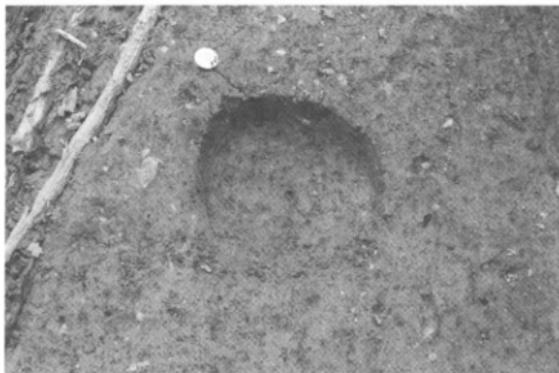
1. Po13 (青磁・碗) の検出状況



2. 発掘体験風景



3. 発掘作業風景



1. P01 の検出状況 (D-c 調査区)



2. 下位層の確認状況 (試掘坑 4)



3. 流木の検出状況 (試掘坑 2)



1. D-a 調査区の完掘状況（西から）



2. D-b 調査区の完掘状況（東から）



3. D-c 調査区の完掘状況（南から）



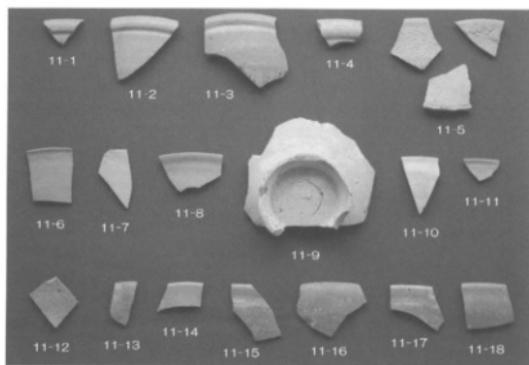
1. 遺跡の完掘状況（東から）



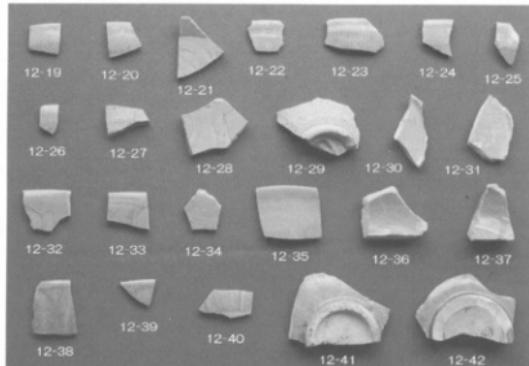
2. 遺物採集地点を望む



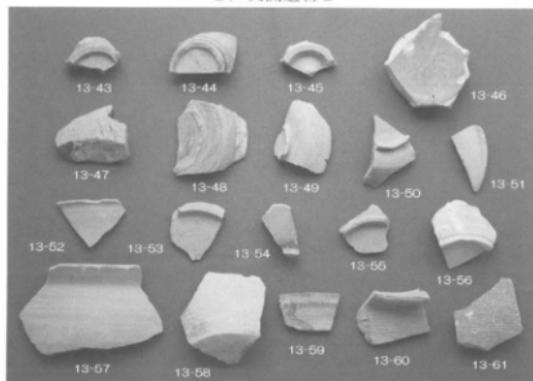
3. 施工後の調査地点（西側から）



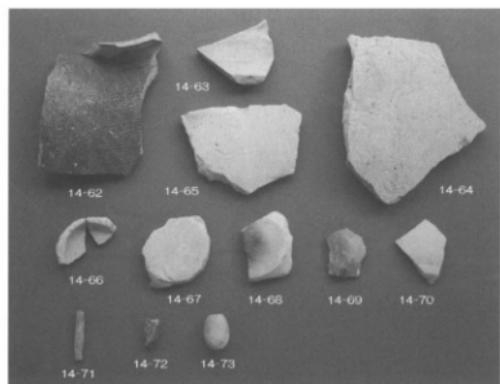
1. 実測遺物 1



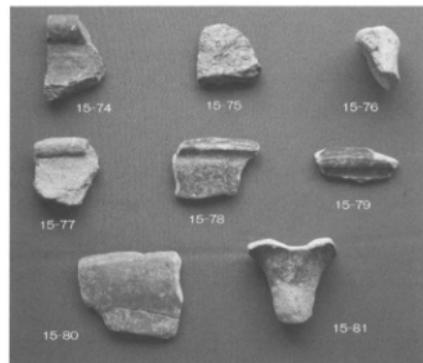
2. 実測遺物 2



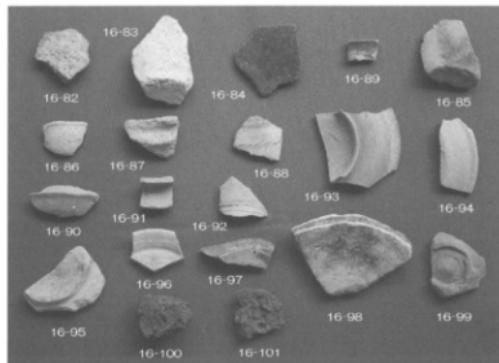
3. 実測遺物 3



1. 実測遺物 4



2. 実測遺物 5



3. 実測遺物 6 (採取遺物)

## 報告書抄録

ふりがな	まるやまいせき
書名	丸山遺跡
副書名	経営体育城基盤事業隅地区に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	山本 浩之
編集機関	益田市教育委員会
所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 Tel0856-31-0623
発行年月日	2010年3月19日

所取遺跡名	所在地	二一寸		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
丸山遺跡	島根県 益田市 隅村 町	32204		34° 36' 37"	131° 48' 59	2008.5.27 ~ 2008.7.17	270 m <sup>2</sup>	圃場 整備 事業
遺跡名		種別	主な 時代	主な遺構			主な遺物	
丸山遺跡		集落跡	弥生、 古代～ 中世、 近世	柱穴状遺構 1基、及び 暗渠(近代)			弥生土器 土師器 須恵器 青磁・白磁 国産陶磁器ほか	

### 丸山遺跡

～経営体育城基盤整備事業隅地区に伴う発掘調査報告書～

平成22年3月発行

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市元町11番15号

印刷 富士印刷株式会社